慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	兎と鰐説話の傳播(下)
Sub Title	On story of Rabbit and Crocodile (II)
Author	西岡, 秀雄(Nishioka, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.29, No.3 (1956. 12) ,p.109(337)- 121(349)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19561200-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

兎と鰐説話の傳播（下）

西岡秀雄

一、はしがき
二、日本の「兎と鰐」説話
三、「兎と鰐」説話の起源論
四、安南の「兎と鰐」説話
五、カンボジアの「兎と鰐」（以上前號）
六、マライの「兎と鰐」系説話
七、その他の「兎と鰐」系説話
八、結　論

（六）マライの「兎と鰐」系説話

マライの「鼠鹿と鰐」の話は、イギリス人によつてかなり澤山採集され、すでに色々の形で發表されている。まず古い方から順に紹介すると、一九〇五年ウインセット（R. V. Winsedtt）というイギリス人が、シンガポールで出した「或るネズミ鹿の物語」（Some Mouse-Deer Tales）という記錄が擧げられる。[the Journal of the Straits Branch Royal Asiatic Society, No. 45, 1905. Printed at the American Mission Press, Singapore, 1905.] これは原本を入手できなかつたので、昭和十七年十一月一日、筆者はシンガポールを訪れた際、當時は昭南博物館の附屬圖書館と稱している

所で、このコッピーを採つて置いた。この記錄は、マライ半島ペラク（Perak）の住民から採集したもので、その元はマラッカに居住した一人のジャワ人が、彼の持つていた古くさい部厚いジャワ語の本によつて、子供のときに話して聞かせてくれた話という。（筆者はこのジャワ語の部厚い本を追求しているが、未だ判らない。識者の御教示を得れば幸甚である。）話の内容は、倒れてきた大木に尻尾をはさまれた鰐が、水牛をだまして助けてもらい、しかも命の恩人の水牛を、その命の助かつた鰐が食べようというので、鼠鹿が奸智で水牛を救い、その後鰐と鼠鹿は非常に仲が惡るくなる。そして川に水を飲みに來た鼠鹿の足に鰐が喰いつくが、鼠鹿はあわてないで「枯（かれ）枝をなぜ食べるんだい」と質すので、鰐は本當に間違えたと思つて口をゆるめたとたんに鼠鹿は逃げだし、そして大河をどうして渡つて逃げようかという段で、今度は豫言者ナビ・スレイマン（Nabi Sleyman）の使者だといつわつて、鰐の數を調べるから川面に一列にならべと命じ、鼠鹿は型のごとく鰐の背を一・二・三……と踏び渡つて對岸に渡り、「沈んでも良いよ!!　鰐のバカなやつ。」という話になる。なおこの話は未だ色々に續くが、本稿では省略する。

つぎが一九〇七年にマックスウェル（Sir George Maxwell）が、エディンバラとロンドンで出した「マライの森の中で」（In Malay Forests）という著書に收錄されている「路傍のはなし」（A Tale by the Wayside）である。ここにも、マライで最も有名な民話として鼠鹿の話を色々載せているが、問題の個所は或る時鼠鹿が川を渡ろうと思つたが、鰐が恐ろしくて泳ぐこともできなかつたという始まりで、結局ワニの王ラジャ（Raja）と世界中でどちらが數が多いかを議論し、擧句にワニがラジャの命で一列に川面にならび、最後に、ワニの王は多くの臣下の前で對岸に渡つた鼠鹿に恥をかかされるということになる。

一九一六年ディクソン(R. B. Dixon)の「太平洋神話」(Oceanic Mythology [The Mythology of All Races, IX. Boston])では、川が洪水で泳ぐことも渡ることもできなく困つた鼠鹿が、王様の命令だといつわつて鰐を一列にならばせ、やはり一・二・三……と數を算へて對岸に渡り、鰐をあざける話を載せている。ウィンセットやマックスウェルの例と異なるのは、川が洪水で渡れないという點である。

一九二〇年にはジャワの Balai Poestaka から發行された Tjeritera Kantjil Jang Tjerdik と題するマライ文の書物に、「いかに多くの鰐どもが小鹿のために橋を作らされたか」(Beberapa ekor boeaja diboeat djambatan oleh kantjil) という見出しで、先に述べたマックスウェルの採集した話と同系の話を載せている。このマライ語の原文は、すでに堀岡文吉氏がその著「日本及汎太平洋民族の研究」三五四―三五六頁(富山房、昭和二年)に轉載されているので、本稿では省略する。

ついで一九三三年カードン(R, Cardon)というパリ海外派遣協會(Société des Missions-Etrangères de Paris)のフランス人が、ホンコンで出版した「マライの小話――パランドの物語」(Contes Malais ―― Le Roman de Palandok.)の第二十一章に、「いかにして鼠鹿は鰐たちを二度も嘲弄したか」(Comment, par deux fois, Pelandok berna les Si Rangkak)と題して、かなり潤色された類話が載つている。しかし、話の内容は、最初に擧げたウインセントの例を、前後逆に述べた型式で、つまり最初に鼠鹿は對岸に熟した果實があるのを見て、これを食べようとして鰐をだまし、ソレイマン(Soleyman)王の命令だとして一列にならばせて渡河に成功したが、だまされた鰐たちはおこつて、二度と鼠鹿が水を飲むことのできないように河で待ち伏せし、遂にその足を捕えるが、再び鰐は前述の

ごとく騙され、鼠鹿に逃げられてしまうわけである。

つぎは一九三八年にロンドンでヒルマン（A. Hillman）とスキーツ（Walter W. Skeat）という者が出した「鼠鹿サラム――マライの森の不思議な物語」（Salam The Mouse-Deer――Wonder Stories of the Malayan Forest）という子供向きの本の第八夜に、右に擧げたカードンの例と同型の類話を述べている。なお同書の著者の一人スキーツは、「マライの魔術」（Malay Magic）の著者で、Malay States Civil Service に勤務していた英人である。また「鼠鹿サラム」の八二頁には、レイドゥロー（Mr. G. M. Laidlaw）という人が採集した類話がある旨を脚註に記してあるが、筆者はまだ見る機會を得ない。前のカードンの「マライの小話」の中の註記にも、『この二つの挿話はレイドゥローによつて提供されたもので、彼はそれをペラク（Pérak）の賤民の Haji Ali, Penghulu de Pulo Tiga 〔A Pelandok Tale, the Journal of the Straits Branch Royal Asiatic Society, No. 46, 1906, p.79〕から借りている。〔カードン同書一六二頁〕

さて一九三八年にシンガポールにおいて出版されたマックニース（K. McNeish）とルイス（M. B. Lewis）共編の英語のリーダー（Malayan Reader）初版からは、鼠鹿が鰐のラジャをだまして對岸に渡る部分だけが、繪入りで「利功なトリック」（A Clever Trick）と題して掲載され、さらに日本がシンガポールを昭南島と稱して占領していた一九四二年當時には、心岑（本名は除君濂）という華僑の人が、昭南島で出版されていた華僑を讀者とする雜誌「南光週刊」第八期（昭和十七年十月廿四日出版）誌上に、「南洋民間故事」と題して聰明的小千鹿が鱷魚を二度騙ます話、すなわち最初に渡河に成功し、ついで鰐に足を捕へられたのを上手に逃げる部分が現代中國文で紹介されている。

（七）その他の「兎と鰐」系説話

日本・安南・カンボジア・マライの「兎と鰐」の代表的説話は以上述べ來つた通りであるが、これら以外の地域における類話を茲に纏めて置こう。

北ボルネオでは、エヴァンズ（Ivor H. N. Evans）の報告〔カードシ「前掲書」一六四頁所引〕によると、鼠鹿族と鰐（Buayas）族とが決戰することになり、鹿鼠は岸の砂のあらゆる場所に足踏をつけて置く。七日たつて約束の日に鰐の軍隊が登場すると、鼠鹿は『なんと殘念なことか。あなた達は餘りに來るのが遲かつたので、わが軍は待ちくたびれて解散した所なんだ。嘘はいわない。この足跡を御覽なさい。だが一體そちらはどの位いの數がいるのか知りたいですね。わたしが數を算えられるように、向う岸まで一列に並んでくれませんか』となり、型の如く對岸に行き、騙された鰐が數日後に水を飲みに來た鼠鹿の足を捕えるが、『君がつかんでいるのは私の足ではない。私の足はここだよ。』といつて一片の木を差し出して危く難をさける話になつている。

小出正吾「東印度童話集クスモの花」大東亞圏童話叢書（增進堂昭和十七年）には、ボルネオの説話は二つ收錄されているが、その一つに「小鹿と鰐」と題して、小鹿が何邊も鰐を騙ます話を載せている。第一が『早く岸へやつておいでよ。きみたちの御馳走があるんだぜ』と嘘をついて鰐をおこらせ、第二に鰐が水を飲みにくる小鹿を材木のようになつて待ち伏せしていると、『やいお前は鰐かい。それとも材木かい。鰐だつたら川を下つて見な。材木だつたら川を上つて見な』といわれ、鰐は材木に見せかけようとして川上へ動いたので、『材木が川をさかのぼつてたまるものか、まぬけめ

!!』となり、第三回目にうまく鰐は鼠鹿の足を捕えるが、『おれの足はこつちだよ』と鼠鹿に葦の莖を出されて、また逃げられ、第四回目は鰐は陸へ上つて開墾地の伐り倒した木の中にかくれて鼠鹿を捕えようとするが、それを察知して『王様の命令が出ました。開墾地を今日中に燃やせということです』といつて、地主に火をつけさせ鰐をひどい目に遭わせ、第五番目に川の對岸にあるおいしそうな花を食べたくなつた鼠鹿が、『王様はお前たちを一匹殘らずしびれさせてしまう積りだ。』と鰐にいうので、鰐は『なんとか王様にお許しを願つてくれまいか』と嘆願したので、『ではその嘆願者の數を調べて行かねばならないから、みんな列んでくれ』となつて、鰐は何邊も鼠鹿に騙まされることになつている。

ニューギニアでは、鼠鹿に代つて猿が鰐を騙ますことになり、さらに蒼鷺が話に參與してくる。すなわち、猿が木の實の澤山成つている島へ、蒼鷺に乘つて連れていつてもらうが、蒼鷺が早く歸ろうとせきたてる段になつて、もつと木の實を食べていたい猿が怒つて蒼鷺の羽をむしつてしまう。そこでやがて羽が元通りになつた蒼鷺は、その島に猿を置き去りにして飛び歸つてしまうので、海を渡ることができなくなつた猿は一計を案じ、鰐が海岸に寢ている間に砂濱に澤山猿の足跡をつけ、鰐を呼び起して、どちらの族が多いかということになつて、鰐が一列に並び數を算へられる話になる。〔堀岡文吉「日本及汎太平洋民族の研究」三四一・三四三頁。冨山房・昭和二年〕鳥の羽をむしる點は、因幡の白兎が毛をむしられる點を想わせるし、足跡をつける點は、エウァンズの報告した北ボルネオの話と同型になつている。

セレベス島のミナハサ半島でも、猿が鼠鹿に代つている。ヒクソン（Sidney J. Hickson）の報告〔A Naturalist in North Celebes, p. 312（カードン「前掲書」一六六頁引所）〕によれば、最初に若い鰐が小島に囚人となつている猿に、食べ

てしまうぞというと、猿が『お前は餘りに小さ過ぎる。もつと仲間を探しに行つてきた方が良いだろう』と嘲笑したので、澤山鰐が仲間を連れて來て、猿は一列に鰐を並べて、その數を算えながら逃げ出してしまう。

ミンダナオ島の南端部に住むサンギール族（Sanguiles）の類話では、猿が溺れようとする時、鱶が現われて食べようとしたので、『俺には肉も臓腑もないぞ』と猿がいつたところ、鱶が「どこえ置いて來たのか」と質したので、猿は『海岸に置き忘れて來た。もし岸まで運んでくれるなら取つて來てやろう』といつて、鱶の脊に載せて行つてもらい、岸につくと、『しばらく待つていな。取つてくるから……』と猿はいゝ捨てゝ逃げてしまい、鱶はそのとき潮が引いて死んでしまつたという筋書きである。〔堀岡文吉「日本及汎太平洋民族の研究」三三九頁。冨山房・昭和二年〕

セイロン島では鼠鹿が金狼（ジャッカル）に代り、象の死骸を食べたくなつたが河を渡れない金狼は、一匹の鰐に出遭い、『君はどうして獨身でいるのかね？　君が河を渡してくれゝば、君のために婦人を見つけることができると思うんだがネ』といつた調子で鰐をだまし象の死骸が骨だけになるまで、何回も鰐は夢中になつて金狼を輸送する。〔Parker: Village Folk Tales of Ceylan. "The Crocodile's Wedding", vol. I, p. 216（カードン「前掲書」一六三頁所引）〕

インドのパンジャブ（Penjaab）地方では、前記セイロンと同じく話は金狼と鰐の組合せであるが、獨身の男の鰐に話しかけないで、鰐の令孃に金狼がお世辭をいうので、彼女は自分の容貌に引かれたものと良い氣持ちになつて、金狼が食べたい果實のある所まで河を渡してやる話になつている。〔Tales of the Punjab, p. 230（カードン「前掲書」一六三頁所引）〕

インドのベンガル中央部のサンタル族（Santals Parganas）においては、金狼は河を飛び越えそこなつて水中に落

ちた時、一匹の鰐に大きな肉切れを報酬とする約束で岸まで連れていつてもらつたが、岸に上ると金狼は救い主に『兩眼を閉じて口を開いて下さい』といつて、鰐が口を開けたところへ大きな石を入れて逃げ、その後泉の近くで待伏せしていた鰐に金狼は足を捕えられるが、『木の根を足だと思つているのか、お馬鹿サン』で再び逃げることに成功する。〔Folklore of the Santal Parganas, transl. by C. H Bompas, "The Jackal and the Leopards", p. 341（カードン「前掲書」一六三―四頁所引）〕

大體インドやセイロンの說話は、鰐が一匹で金狼を渡河せしめる點、すでに述べた安南やカンボジアの兎と鰐の話に類似し、しかもセイロンの金狼が鰐の結婚相手を探してやるという筋は、安南の兎が美しい妹を鰐にやろうといつて騙した話と通じている。

なお筆者が昭和十七年十一月十日、當時昭南島の日本軍政部で、同部の顧問をしておられた德川義顯氏と會談した際に、同氏のお話しによれば、カムチャッカにも類話があるが、ここでは兎が鯨を騙している由であつた。

八、結　論

さて以上縷々述べ來たつた各地方における本說話の主人公と、それらの實際の動物の分布とを一表に纏めると附表のように整理される。そしてこの表によつて、本說話は先づその起源をインド・セイロン方面に発し、それが東進してカンボジア・安南方面に傳わると、金狼（ジャッカル）は兎に代り、日本へは「古事記」以前に兎と鰐の說話として傳えられ、「古事記」以前に兎と鰐の說話として傳へられ、「古事記」にも明瞭に和爾（ワニ）と記錄されたが、日本には鰐がほと

地方	動物分布																	本説話主人公
カムチャッカ																		兎と鯨（多數）
日本																鮫	猿	兎と鰐（多數）〔鮫〕
安南															鮫	鮫	猿	兎と鰐（一匹）
カンボジア														鮫	鮫	鮫	猿	兎と鰐（一匹）
セイロン												鼠鹿	鮫	鮫	鮫	鮫	猿	金狼と鰐（一匹）
インド												鼠鹿	鮫	鮫	鮫	鮫	猿	金狼と鰐（一匹）
ボルネオ												?	鮫	鮫	鮫	鮫	猿	鼠鹿と鰐（多數）
マライ												?	鮫	鮫	鮫	鮫	猿	鼠鹿と鰐（多數）
ニューギニア												鼠鹿	鮫	鮫	鮫	鮫	猿	猿と鰐（多數）と蒼鷺
セレベス												鼠鹿	鮫	鮫	鮫	鮫	猿	猿と鰐（多數）
ミンダナオ													鮫	鮫	鮫	鮫	猿	猿と鰐（一匹）
カムチャッカ											鯨							
日本											鯨							
安南											鰐							
カンボジア											鰐							
セイロン											鰐							
インド											鰐							
ボルネオ											鰐							
マライ											鰐							
ニューギニア											鰐							
セレベス											鰐							
ミンダナオ											?							
カムチャッカ										兎								
日本										兎								
安南										兎								
カンボジア										兎								
セイロン										?								
インド										兎								
ボルネオ										兎								
マライ																		
ニューギニア																		
セレベス										?								
ミンダナオ										?								
カムチャッカ																		
日本																		
安南																		
カンボジア																		
セイロン	?																	
インド	金狼																	
ボルネオ	金狼																	
マライ																		
ニューギニア																		
セレベス																		
ミンダナオ	?																	

附表　「兎と鰐」説話に關する地域別一覽表

んど見られなかつたので、近年遂に一部の學者によつて鰐は鮫であつたごとく解釋され、國語教科書から巷間の兒童繪本に至るまでワニザメ説が風靡する結果を招いたわけであるが、「古事記」の和爾が南方の鰐であつたことは最早や議論の餘地はないのである。

そして他方カンボジアや安南に傳わつた兎と鰐の話は、いつの日かマライ半島にも傳播したが、マライ半島には兎がいないために、鼠鹿が代用され、鼠鹿と鰐の説話は更にボルネオにも傳つたのである。しかし鼠鹿の棲息しないニューギニアやセレベスでは、鼠鹿に代つて今度は猿が登場したわけで、つまり金狼から兎へ、兎から鼠鹿へ、そして更に猿へと「所變れば品變る」で變轉して行つたのである。鰐の方はその間變更されず、僅にミンダナオで鱶になり、日本では近年ワニザメ説が横行して、危うく「古事記」の和爾まで鮫にされそうになつたわけであるが、カムチャッカでは遂に鯨に轉向されてしまつたわけである。

なお、筆者がマライの鼠鹿と鰐の説話がカンボジアや安南に傳播したと見做さなかつた理由は、すでに拙稿「因幡の白兎傳説の南海

傳播」（亞細亞研究第三〇卷 第一〇號昭和十八年）や拙著「人文地理學」下卷一七五頁（櫻書院昭和三十一年）に述べたごとく、第一に兎と鰐の組合せは古事記に記載されている點で、かなり古型と考えられることと、第二に動物學者の調査による〔註〕と、鼠鹿はマライのみならずカンボジヤ方面にも棲息しているので、マライの鼠鹿の話がカンボジア方面へ傳播した場合は、カンボジアで鼠鹿を兎に代へる必要はないが、カンボジア・安南系の兎の話がマライに行けば、兎がいないので鼠鹿が登場しても不合理ではないからである。

〔註〕 Boden Kloss: Notes on Malayan and Other Mouse-Deer. (Journal of the Federated Malay States Museums. Vol. VII, Part IV, Singapore 1918)

なお、このようにして南方から日本に「古事記」以前に傳來した本說話が、出雲の大國主命の神話と結合した際に、特に出雲の海岸を採らず殊更に因幡の白兎として因幡國の海岸氣多岬が選ばれたのは、現在の鳥取縣氣高郡末恒村白兎神社下の氣多岬附近の海岸地形が、海岸からすぐ冲合にある小島「淤岐島」（隱岐島ではない）までに、海面にあたかも鰐を幾匹も並べたように岩が並列しているので、古くからこの說話を知つていた人々がこの地と結びつけて考えられていたからと思われる。

津村勇氏はその著「鳥居考」（內外出版 昭和十八年）に、因幡白兎神社の鳥居について觸れられているが、そこにワニは航海を業として沿海をおびやかした賊つまり海賊であり、ウサギはこの地方を治め信望の高かつた一族であると說明されているが、これは既述の南洋民族說に分類されるべき意見であることはいうまでもない。ここに追記して置く。

ともかくも廣い視野に立つて觀察すれば「古事記」の和爾は決してワニザメでもウミヘビでも、はたまた、舟や南洋民族でもなく、南方に廣く傳播した說話の鰐そのものと素直に考へるべきものである。

この點について、故折口信夫教授が昭和十八年二月、日本諸學講演集（第四輯）國語國文學篇に「古代日本文學に於ける南方要素」（折口信夫全集 第八卷 昭和卅年所收）と題して語られている中に、この鰐の話にも觸れて、

實は、聲を細めて囁くのでなければ禮を失するかも知れませんが、歷史家のある學風には、考へ方が單純で、素朴で思考法において、ある英雄を思はせるような所のある學風もありました。（中略）四十年も前になりましようか。故喜田貞吉博士が隱岐島へ行かれました。「わにを喰べて來た」、こう言うことを申されました。それは鱶のことでした。だから神代の卷に出て來る「わに」は、實は鱶なんだ、と言うようなことを申し出されて、皆一時それに贊成しました。其に到るまで、南方の鰐と、日本の國土と、此關係が、どうしてもわりきれなかつたのでしたから、此でからりとした譯なのです。しかし考えて見ると、一體何故、「わに」と言う語が、南方の鰐魚を意味してはいけないか、と言うことです。それは恐らく、少しの努力もなしには、今日の我々でも、「わに」を見ることは出來ない。動物園にあるからこそ見ることが出來るのだ。小道具に張つて居ればこそ見ることが出來るのだ。其位の考へでしよう。昔の人は見ることは出來まい。其だから昔物語のわにも、此國語で古く表した別の動物の名が、現在の物の上に移つたのだとするでしよう。しかしそれは、非常に短氣な話で、日本民族の持つた非常に廣い經驗というものを輕蔑して居るのです。日本民族は、昔から知り難い多くの獸を知つて居りました。

と、國內發生說論者には耳の痛い前置きを述べ、さてその理由として折口教授は

祭りの時に、尊い神様が來臨なさる。――私共は之をまれ人神と申して居りますが――所が、今度は神及び神の威光を示す神人ばかりではとゞまらなくなつて、威力のあるもの――野獸とも、人間とも訣らないものが出て來なければ、精靈・魍魎の惡あがきを壓服することが出來ぬと考える地方が出て來ます。その爲には全く、空想の獰猛な動物を出すこともあつたようですが、まる〳〵の空想というものには限度がありますから、傳へ聞く外國の動物の名と、假りの姿とを持つて來る。恐らく或點まで知つて居る人もあつたのだろうと思います。（中略）さすれば、我々の祖先が、「わに」を知つたのも、不思議はない。（中略）簡單に言いますと、我々の祖先の一部の傳誦した物語が、非常に勢力を持つて來て、殆民族の昔話という樣に說話化せられたのではあるまいかと思つて居ります。だから、まれびとゝしての鰐は固より、その知識から出たものであり、同時に、物語や昔話としては、民族の舊土以來の形が傳つて居たと見られるのです。そう言う風に、我々の祖先の一部が長く鰐と馴染を重ねて來て居つたので、日本の國に來ても、忘却に委する譯にはいかなかつたのでしよう。

と論じ、更に

此等民族の祖先の一部の人々が携えて來た物語は、日本以前にあつた物が、此土に移つて又更にある妥當性を加えるようになり、ある點は減退もしたろうが、ある部分は育つて來たと言うことも考へなければならぬと思います。何故ならば鰐の物語は、「因幡の白兎」の類型とか、或は小さな狡猾な動物――鰐の口にのつて殺されに行こうとしたのが、今度はあちらこちらに、鰐を騙して逃げながら惡口するという類型。此は南の方では、一つの話になつている事が多いようです。そう言う物語はどうも日本國以前に、我々の祖先が持つて居つて、此處に來て更に育てたものでは

がかろうかと言う氣が、誰にもする筈だと思います。

云々と言及されている。これは、特に白鳥・喜田両博士を中心としたワニザメ説を顔色なからしめるものと思はれる。折口教授の論考は、既に南洋ワニ説の項に擧げた松本信廣教授の論考などと共に、南洋ワニ説の項に列擧すべきであつたが脱漏したので茲に追記した。

ともかくも筆者は各地の類話を弘く集めた結果、松本信廣・折口信夫両教授を中心とした南洋ワニ説が卓見であり、古事記の和爾はワニザメやフカなどを指したのではないことを再確認する者である。